

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 高木 丈也

本論文は、日本語と朝鮮語の談話に見られる諸形式とその機能の関係を、実際の談話において頻繁に出現する「中途終了発話文」を中心として、両言語を対照しつつ考察したものである。一般的に、文法研究では、最後まで言い切った完成文を扱うことが多いが、実際の談話では、そうでない文も少なからず現れる。本論文は、日本語と朝鮮語について、それらの形式にどのような種類があり、談話においてどのような機能を果たしているのかを明らかにしようとするものである。両言語は文法構造がよく似ているが、本論文は中途終了発話文の現れ方には重要な違いが見られることを明らかにし、それが両言語の話者のコミュニケーションストラテジーの違いと関連していることを指摘している。

第1章から第3章までは序論的な部分で、研究対象、用語の定義、研究方法、談話採取調査の概要と文字化の方法、両言語の対照のための発話形式の枠組みの整理、採取された談話資料全体の統計的分析、各発話をもつ談話的機能の分類を行っている。第4章から第8章までは本論文の中心となる部分で、第4章では情報要求発話がどのように用いられ、その中で中途終了発話文がどのような役割を果たしているか、第5章では中途終了発話文が質問文として機能するのはどのような場合か、第6章では質問に続く応答のパターンにどのような場合があるか、第7章ではくり返し発話の現れ方とその機能は何かを、いずれも両言語を対照しながら考察している。続く第8章は以上の結果を検証する意味で、談話に対する意識について両言語の話者に対して行ったアンケート調査をまとめ、4～7章までの結果を補完し、第9章は本論文全体をまとめ、今後の課題について述べている。

本論文の意義は、まず、十分な量の実際の談話資料によって、日本語が朝鮮語より中途終了発話文をより多く用い、かつその形式も多様で、使用域が広いことを明らかにしている点にある。また、対話参加者の属性との関連においても日本語と朝鮮語の間で興味深い違いを示している。日本語話者の場合、中途終了発話文は、同年、年下の相手に対しては、相手への親近感を表わすポジティブ・ポライトネスとして機能するのに対して、年上の相手には、私的領域に踏み込むのを避けて遠慮するネガティブ・ポライトネスとして機能するが多いのに対して、朝鮮語話者では相手との年齢差によって、中途終了発話文の使用率に顕著な違いがあり、同年、年下に対してはポジティブ・ポライトネスとして用いられるが、対年上では、中途終了発話文の使用率が低く、ネガティブ・ポライトネスとしては機能しないことを示していることも興味深い。また、質問に対する応答やくり返し発話についての考察では、日本語では相手への協調的な発話が多いのに対し、朝鮮語では要求型の発話によって談話を展開させているという指摘も興味深い。

本論文は、論述のしかたについていくつか改善すべき点も見られるが、通常の文法の対照研究では見えてこない両言語の話者の談話展開ストラテジーの違いを明らかにしたことは大きな功績である。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。